



されたいとの思いで一生懸命でしたが、人に指示することに気をとられてしまい、命令口調になってしまったり、重労働から離れてしまう傾向が見受けられました。

「いつも一人だけ楽しすぎる」「えらそうに指示してくる」などと思い始めたほかの利用者が正人さんと距離を置くようになり、なかなか作業が進まなくなりました。正人さんは「なぜ？ 自分はみんなのために指示を出しているのに」と悩んでしまい、時には気持ちの整理がつかず、作業途中で帰宅したこともありました。

このままではいけない、なんとかしたいと思った正人さんは、相談支援員との面談で「リーダーとしてしっかりしたい」と言い、どうしたらリーダーとして認められるのかを話し合いました。「上の立場から口先だけで指示するだけでは人はついてきてくれないのではないか」「リーダーがまず作業内容を理解してから率先して動くことで、みんなに認めてもらえる力をつける必要があるではない

か」といったことが話し合われました。

ステップアップ、新しい人間関係

みんなに認められたい、成長したい気持ちが強くなった正人さんは、支援学校時代の友人からリフレの話聞き、農産加工所で働きたいと思うようになりました。

今までの野外での作業とは違い、食品製造にかかわる農産加工所での作業は、身だしなみはもとより、健康、衛生面など気をつけなければならぬことが多く、また加工するための果物や野菜をすりつぶす大型ジューサーや果汁と果肉を分ける遠心分離機などの精密機械を扱ったり、蒸気や熱湯など危険なことがあることも説明しました。

それでも新しい場所で一から作業を覚え、自身のステップアップのために力をつけたいという正人さんの決意は揺るぎませんでした。何度も本人・家族と話し合った結果、実習を経て農産加工所で

働くことになりました。

作業において人には負けない自信があった正人さんでしたが、農産加工所立ち上げ当初からコツコツと仕事を覚え、がんばって力をつけてきたほかの利用者との力の差は大きく、自分ができないことを難なくこなす姿を見て、負けない強い正人さんはいへんくやしい思いもしました。自分が提案した作業内容がほかの人になかなか理解されない、今まで指示を出す側でしたが、班長やほかの先輩利用者から指示を出される側になったことから、くやし涙もよく出ました。

また、職員に評価をされたい気持ちから、目立つこと、自分のなかでかっこいいと思う作業ばかりをし、洗いや野菜の皮むきなど面倒で地味な作業や、トマト・リンゴなど重たい加工原材料運びなどの重労働から逃げ出してしまうこともあり、ほかの利用者との溝が一層深まってしまい、どうしたらいいのかわからなくなっていました。

働く生きる 私らしく from よさのうみ



第4回
一般就労をめざす利用者とともに
リフレかやの里 農産加工所 矢嶋広和

誰しも「働く」権利があります。それは障害というハンディキャップがあっても、本人が望むのなら働くことができます。多様性が求められる昨今、いろいろな働き方がありますが、それが必ずしも本人の望む働き方ではないかもしれません。

また、なりたいたい自分にたどり着くまでにはさまざまな障壁が立ちまはかります。「一般就労がしたい」と希望をもった正人さん（仮名・30歳）も今その壁をひとつ乗り越えようとがんばっています。その姿を通して、一般就労をめざす利用者の「働く」を考えたいと思います。

リフレかやの里

リフレかやの里は、与謝野町所有の宿泊型保養施設です。2011年より、よさのうみ福祉会が町の指定管理を受けて、障害のある方の働く場として管理・運営を行っています。レストラン・浴場・ホテルに加えて、新たに農産加工

所、パン・ケーキ製造の機能を加えて、障害のある人たちの仕事の場を広げました。

2018年度からは当法人の他事業所から農業班が移籍して、現在26名の利用者がそれぞれの部署で働いています。事業種別は、就労継続支援A型、B型の多機能型事業所となっています。

リーダーとしての 思い・葛藤

正人さんは支援学校卒業後、「夢織りの郷」に入所し、農耕作業をしているハウス班で九条ねぎの栽培をしていました。家族からもがんばって働くことへの期待も高く、本人も農作業にやりがいを感じていました。人とコミュニケーションをとることが得意な正人さんは職員やほかの利用者とも関係は良く、数年後には班のリーダーとして作業を引っ張っていく存在となりました。

リーダーになってからの正人さんは、がんばって作業を進めて褒められたい、ほかの利用者に尊敬